

戸田市教育政策シンクタンク アドバイザリーボード資料

誰一人取り残されない学校を目指して

教育データ利活用による多層型支援システムの実装

令和 8 年 3 月 1 1 日

戸田市立戸田第二小学校

校長 手塚 浩

児童数

892人

学級数

通常学級 28学級 特別支援学級 2学級

特別指導教室

日本語指導教室、ぱれっとルーム（校内教育支援センター）

教職員数

60人（県費常勤45人、非常勤・市費15人）

Mission — Vision — Value

教育目標 Mission <果たす役割>

校訓 「自主」「誠実」「和楽」
 「心豊かに 21世紀を たくましく 生き抜く子」の育成

目指す学校像 Vision <目指す姿>

誰一人取り残されない学校

多様な児童一人一人と学校のWell-beingを創る

育成を目指す資質・能力と目指す児童像 Vision <目指す姿>

Agency : 自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力

重点的に育成する資質・能力 「創造性」「問題発見力」「論理力」「主体性」

創造性

- 好奇心と意欲を持ってチャレンジする子
- 多様な価値観を尊重しながら自分の考えを持つ子
- 新しい発想やアイデアを考え実現しようとする子

問題発見力

- 身近な様々な事象に興味・関心を持つ子
- 問いを立てられる子
- 疑問に思ったことを進んで調べたり考えたりする子

論理力

- 自分の考えをわかりやすく表現する子
- 学んだことを生かして行動する子
- 相手の気持ちや考えを理解し大切にできる子

主体性

- 自分から進んで学びに向かう子
- 粘り強くやり抜く子
- 自分で考え判断して行動できる子

目指す教師像 Vision <目指す姿>

「教える専門家・学びの専門家」として信念と誇りをもって学び続ける教職員
 一人一人のよさと可能性を伸ばす教職員【確かな指導・支援力】
 多様な児童に豊かな心を育む教職員【豊かな人間性】
 研修と修養に努め、互いに磨き合い高め合う教職員【向上心・同僚性】
 保護者・地域に信頼される教職員【誠実】

学校経営方針 Value <大切にしている価値観>

以下を指針に、すべての児童が学校生活が楽しい、学びが楽しいと実感できる教育を行う。

- 1 多様な児童が在籍していることを前提とした学級経営と授業を創造する。
- 2 全教育活動を「個別最適」の視点で進める。
- 3 教育活動の評価は全体・集団・平均の観点ではなく、一人一人の伸びと変容を重視する。
- 4 問題行動を罰や叱責で封じ込めようとせず、ポジティブな声かけや称賛・承認で望ましい行動を増やしていく。
- 5 「教師が授ける」授業から「児童が学ぶ」授業へと授業観を転換する。
- 6 「子供は有能な学び手」 子供は生まれながらにして有能な学び手で、環境さえ整えば自ら進んで学び深めていく。
- 7 「学び手は常に正しい」 児童の行動は、事前の手だてと行動直後の出来事によって変わる。
※ABC行動フレームに基づき、ポジティブな方法で行動支援を行う
- 8 全教育活動に自己有用感・自己効力感を高める視点を取り入れる。
- 9 「生徒指導から児童支援」、「学習指導から学びの支援」へと、児童が主体的に行動し、自律的に学びを進めるための「支援」に教育活動の重点を置く。
- 10 教育の専門家として教育観と教育技術を常にアップデートしていく。

社会モデルの考え方を基盤とした学校運営へ

Vision : 多様な児童一人一人と学校のWell-beingを創る

個人モデル

課題は児童個人にあるのであって、その児童の工夫や努力、我慢などによって解決するべきものである。

転換

社会モデル

児童の困難は環境とのミスマッチから生まれるもので、環境を整える指導や支援によって解決を目指す。

教育データは、児童を評価・管理するためのものではなく、課題を見つけ出し、指導や支援を最適化するために活用する。

誰一人取り残されない学校を創るための3つの柱

責任ある行動をとる力



スクールワイドP B S

問題行動を叱責や罰則で抑え込むのではなく、望ましい行動に注目し、称賛と承認で増やしていく。

新たな価値を創造する力



個別最適な学び

多様な児童の主体性・学習意欲・自律を大切にした個別最適な学びを全学年・全教科で推進する。

対立やジレンマを克服する力



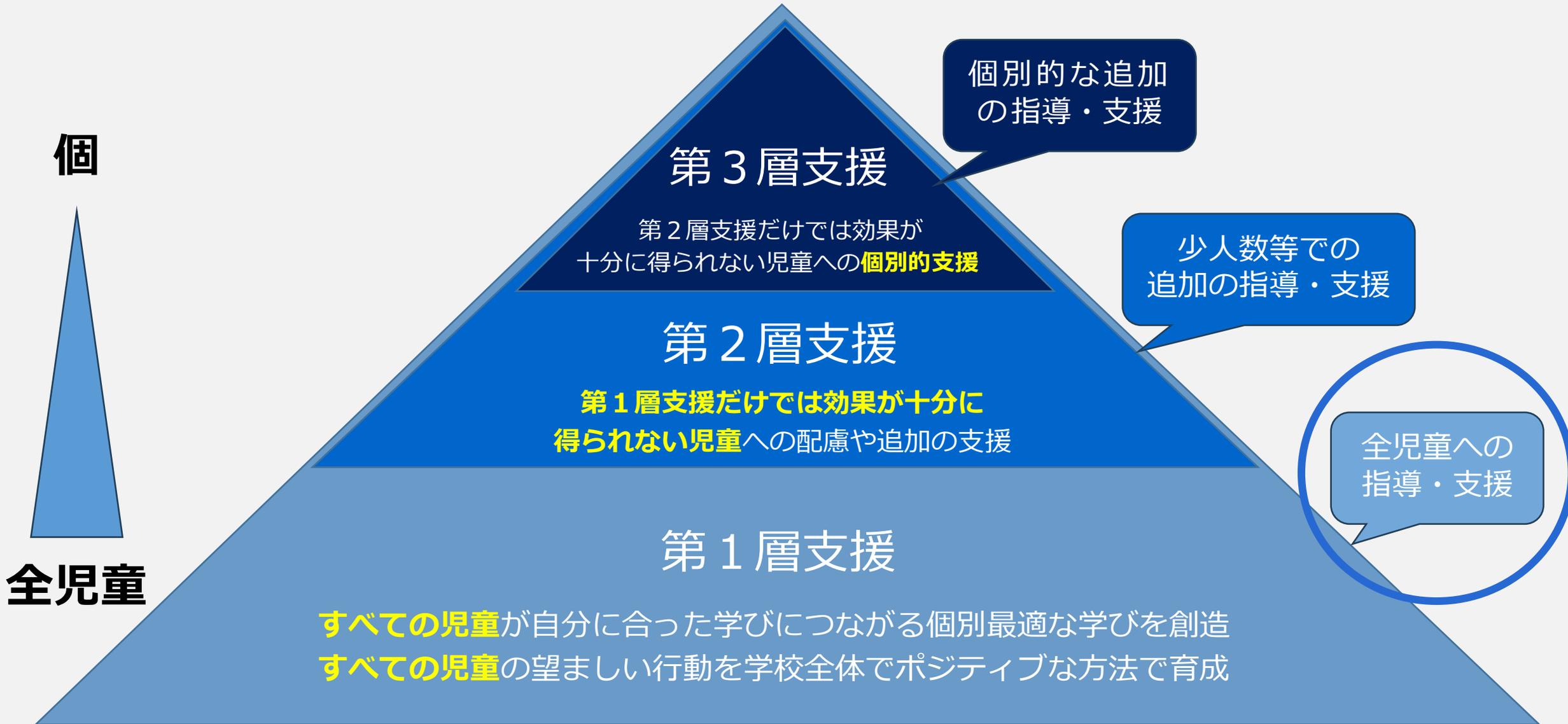
支援スキーム

一人一人に最適な指導・支援を多層型で実行するための、枠組み及び組織的な推進体制を構築する。

児童の自律・主体性を育む教育活動を全教職員で推進

多層型支援システム

—3層支援で児童の学びと行動をサポート—



教育データ利活用による 多層型支援システムの実装

教育データ利活用の視点

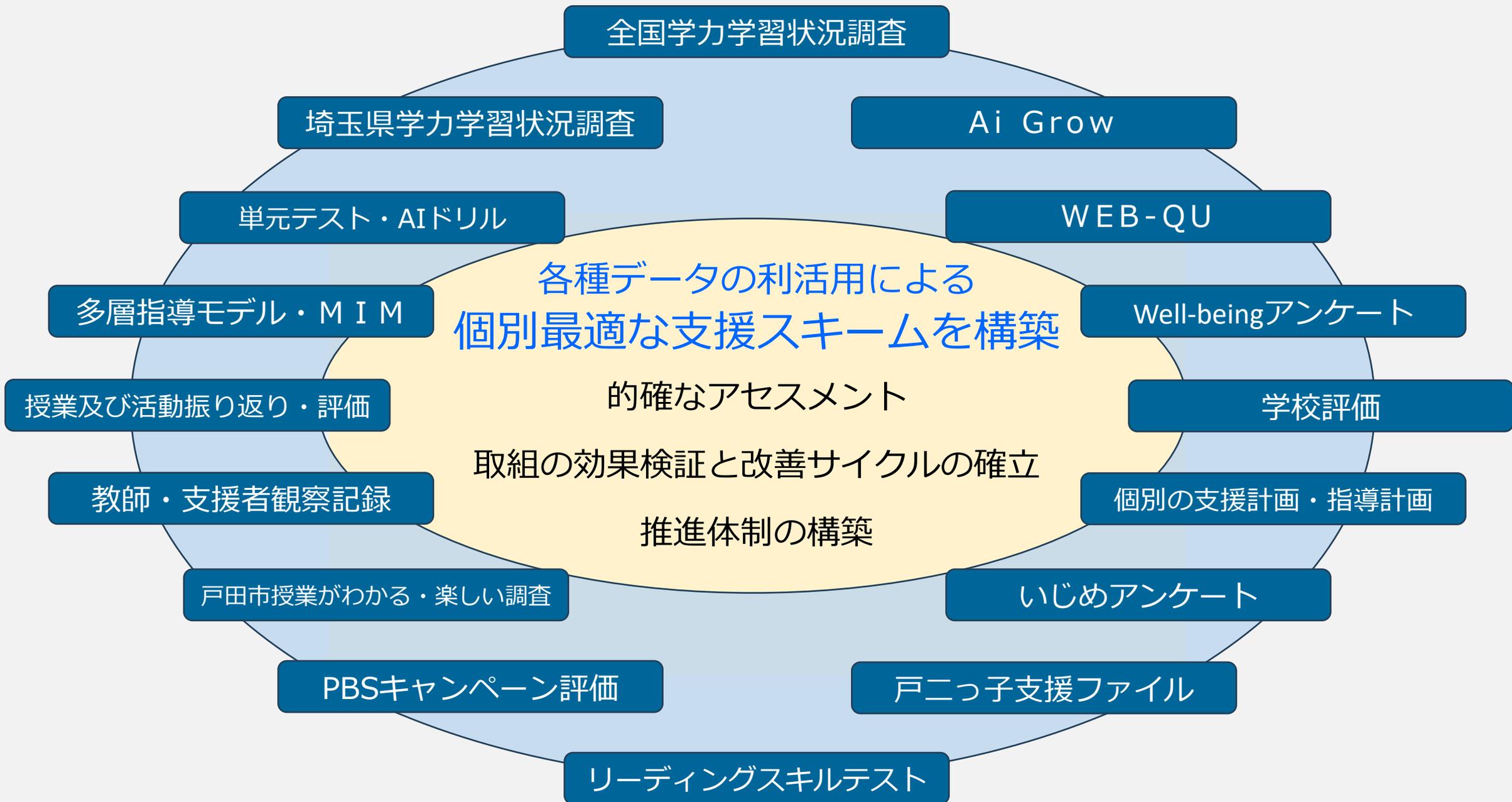
ーデータ活用を目的化せず、「個別最適」と「教員の意識改革」にー

その授業と支援は、 一人一人の最適に届いているか？

「勘」や「経験」だけで、
実態を捉えきれているか？

「実践」だけで終わらず、
効果を検証できているか？

ー 「データ」を児童に寄り添う羅針盤に ー



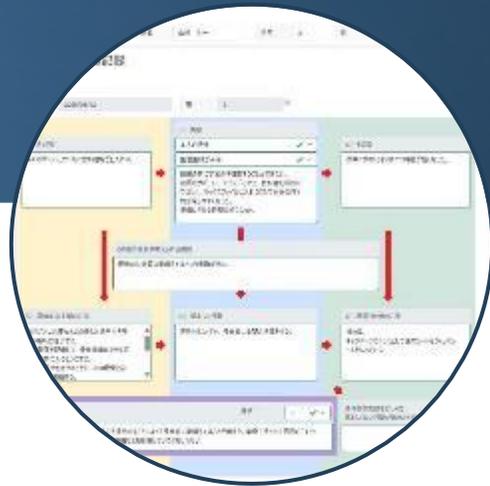
教育データの一元化による支援の最適化と業務効率化



教師の経験知を生かしつつ、客観データを掛け合わせることで、指導や支援の精度と再現性を高め、組織的な対応を可能にする。

学習状況、各種調査、アンケート、見取り等の
定量・定性データを一元化・共有化

戸田市ダッシュボード



A circular inset showing a data table with multiple columns and rows. The table contains numerical and text data, likely representing survey results or performance metrics. The columns are densely packed with information.

A circular inset showing a form or report interface. It includes a date field set to '2025/05/22', a search button, and a table with data. Below the table, there is a button labeled '印刷/印刷の履歴印刷'.

データ活用推進における「学校現場のリアルな壁」

システム（ダッシュボード等）を導入するだけで教育活動は変わるのか？
実際には、次のような「現場の強固な壁」が立ちはだかっている。

① 経験・勘・イメージへの強い依存

「ずっとこのやり方でやってきて問題はなかった」
「データから見えるのは一部。自分の方が確かだ」
という、**長年の経験則への固執。**

② 前例踏襲主義（データ不要論）

「データなんか見なくても毎年業務は回っている」
「なぜ今、あえてやり方を変える必要があるのか？」
という、**現状維持のバイアス。**

③ 「新たな業務」という負担感とスキル不足

「ただでさえ忙しいのに新しい仕事が増える」
というデータ活用=**アドオン（追加）**の意識と、
ICTツールに対する**苦手意識。**

④ 分析し、対話する「時間」の欠如

「日々の業務に追われ、データをゆっくり分析し、
教員同士で対話する時間が物理的にない」
という、**構造的な課題。**

「マインド・時間・スキルの壁」をどう突破していくか

データ活用の壁を超えるアプローチ

「ツール」を入れるだけでなく、「組織風土」と「業務構造」を同時に変えていく

① ビジョン共有と目的の再定義

「データは子どもを評価するためではなく、一人一人に最適な支援や指導をするための羅針盤である」という目的を共有する。

② スモールステップと「とにかくやってみる」

一気に全ての教育活動へ導入せず、まずは活用しやすい取組からスタートする。「データを見してみる」「成果を確かめる」など、最初のハードルを低く設定する。

③ 心理的安全性の担保

最初はツールの操作を個人任せにせず、グループで一つの課題に取り組むことで、活用の心理的ハードルを下げる。「分からないことはすぐ聞ける」フラットな関係性を構築する。

④ 「対話の時間」の構造的な捻出

既存の会議や打合せを精選・短縮し、週1回15分の「サポートミーティング」を時程内に組み込む。教師が「データを見て対話する時間」を構造的に確保する。

「システム」というハード面と、
「対話・風土・時間」というソフト面を両輪で回す

多層型支援の実践

— サポートミーティング（第3層支援） —

チームによる「ABC行動分析」で支援を決定 < 観察→分析→決定→実行 >

STEP 1【アセスメント・要因分析】



STEP 2【支援策の検討・決定】



STEP 3【支援の実行】



1回15分の「超効率的」な対話が、教職員の負担を軽減。
担任の「抱え込み」を解消し、組織としての「即時対応」を実現する。

データは「眺める」ものではなく、「対話のツール」として機能させてこそ価値がある。

年度 2025 リセット

生徒管理コード 氏名 学年 組 番号

サポートMTG記録

記録年月日 2025/06/12 第 2 回

現状欄

a) きっかけ

A4のボックスファイルに教科書などを入れる。

b) 実態

本人の特性

整理整頓が苦手

授業の前に学習の準備をすることができない。前回のサポートミーティングで出た、教科書を机の中ではなく、ボックスファイルに入れることで自分の持ち物が探しやすくなった。準備にかかる時間は短くなった。

c) その後

授業に参加できるまでの時間が短くなった。

その他の背景や考えられる要因

授業前に学習の準備をするという意識が低い。

目標行動

A) 具体的な支援の方法

教科ごとに必要なものの表した掲示物を見える場所に掲示する。席の配置を配慮して、授業準備ができる見直しが視界に入るようにする。日直が号令をかけるときに、次の授業と必要なものを連絡する。

B) 望ましい行動

声をかけなくても、授業前に学習の準備をする。

C) 承認・称賛の方法

褒める。キャンペーンでクラスとして達成シートにつけてシールをはっていく。

2週間後の変容 評価:

声掛けとホワイトボードに必要なものを掲示することによって授業前に準備をするが増えた。学級で行った2回目の「1分前着席キャンペーン」や校外学習への準備なども影響しているかもしれない。

具体的な支援を行っても、望ましくない行動が起きたとき

サポートミーティング（15分ケース会議）
 ABC行動フレームの考え方を生かすシートを活用し、ゴールの行動を（B）として、支援の手だて（A）と、承認・称賛の方法（C）を考える
サポートミーティングでは（A）と（C）を検討

特別支援教育コーディネーターが開催の企画・運営を担当
 参加者は担任、学年教員、関係教職員

ミーティングまでに、アセスメントをもとに現状欄を担任と特別支援教育コーディネーターで相談して入力しておく

目標行動のBをミーティングまでに担任が決めておき、ミーティングでAとCを話し合う

ミーティングで出たAとCの支援策の中から、実行する支援策を担任が選択し、2週間程度実践する

2週間後に実践の検証アセスメントのために、評価ミーティングを行う



個別最適な学び

—目指す学びの姿—

すべての児童が自分に合った学びに
つながり、生き生きと学んでいる

多層型支援の実践

－ R T I モデル（学習支援システム） －

RTI（Response to Intervention）：

児童の「反応」をデータで捉え、個別最適な指導へとアップデートし続ける仕組み

STEP1【単元前アセスメント】

- ・レディネステスト
- ・過去の単元テスト
- ・関連する学習物
- ・児童アンケート 等

実態把握に基づく単元指導計画策定、学習形態の決定、教材準備等



STEP2【形成的アセスメントによる授業のアップデート】

- ・チェックテスト、学習物
- ・授業での教師の見取り
- ・児童ヒアリング
- ・学習計画（進度）表 等

指導計画の修正、教材の追加、学習形態の変更等



STEP3【効果検証と指導改善】

- ・単元テスト、学習物
- ・授業での教師の見取り
- ・児童アンケート
- ・児童ヒアリング 等

次の単元に向けて、指導計画、指導方法・学習形態、教材等の検証

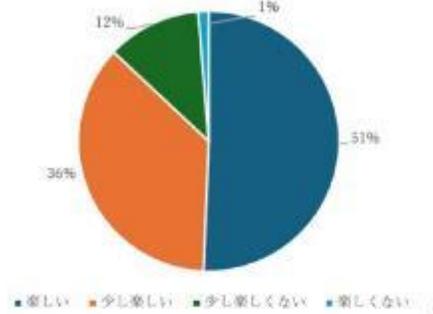
「評価（成績付け）のためのテスト」から、
「指導を改善（児童の力を伸ばす）するためのテスト」への転換

本校の学びのイメージ



アンケート調査より

1 算数の学びは楽しいですか。



選択肢	回答数	割合
楽しい	40人	50%
少し楽しい	28人	35%
少し楽しくない	11人	14%
楽しくない	1人	1%

肯定的でない回答
15%

レディネステスト

問題	問題文	正答率	誤答理由	正解
1	ア、イの三角形は合同です。頂点Aに対応する頂点を答えましょう。	56%	頂点B	頂点I
2	ア、イの三角形は合同です。辺BCに対応する辺を答えましょう。	86%	辺DF、辺FB、辺DE、辺E	辺FE
3	ア、イの三角形は合同です。角Fに対応する角を答えましょう。	96%	角I	角E
4	合同な三角形を見つけましょう。	93%	ケとニ、イとウ	アとイ
5	合同な図形を見つけましょう。	100%		ア

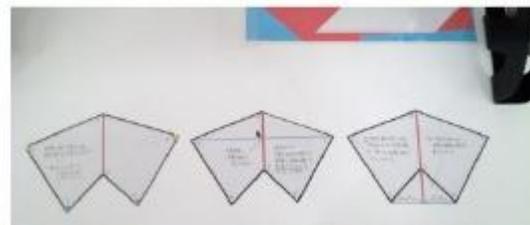
単元前アセスメント・カリキュラムデザイン

カリキュラムデザインシート

単元名	対称な図形			
知識・技能	身に付けたい力		学び終えた時にこんな自分になろう!	
思考力・判断力・表現力	身に付けたい力		学び終えた時にこんな自分になろう!	
学びに向かう力、人間性等	身に付けたい力		学び終えた時にこんな自分になろう!	
評価	B	A	B	C
今日の学び	みんなで学びる		自分を育てる	
学習の進み方	課題も、チャレンジ問題も全て終わった。	課題が全て終わって、チャレンジ問題にも取り組めた。	課題が全て終わった。	終わっていない課題がある。

→ 学びの見通し、身に付けさせたい姿の共有
学ぶ主体性のループリック共有、進捗把握

時数	学習形態	日付	学習内容(ゴール)	教科書のページ	本質が取り出し(取り組んだら算数の色を覚えよう)			(取り組んでものの算数の色を覚えよう)		
					課題	計算スキル	★ドリルワーク(実力別)	ほしゅうの読解(教科書)	★ドリルワーク(実力別)	
1	一斉	6/30	学習の見通しをもとめよう。							
2	一斉	7/1	線対称な図形と対称の軸、点対称な図形と対称の中心の意味を知ろう。	p. 6, 10, 11 p. 14	ロイロノート					
3	自由	/	線対称な図形の性質を知ろう。Part 1～対応する辺、角、点 編～	p. 11	プリント2		♥1-1 ★2-1			♥1-1 ★2-1
4	自由	/	線対称な図形の性質を知ろう。Part 2～対応する2つの点を結ぶ直線と対称の軸 編～	p. 12	プリント3	1	♥1-2	p. 236 ア		♥1-2
5	自由	/	線対称な図形をかこう。	p. 13	プリント4	2	★2-2			★2-2
6	自由	/	点対称な図形と対称の中心の意味を知ろう。	p. 14	プリント5					
7	自由	/	点対称な図形の性質を知ろう。Part 1～対応する辺、角、点 編～	p. 15, 16	プリント6		♥1-3 ★2-3			♥1-3 ★2-3
8	自由	/	点対称な図形の性質を知ろう。Part 2～対応する2つの点を結ぶ直線と対称の中心 編～	p. 17	プリント7		♥1-4 ★2-4			♥1-4 ★2-4



主体的に学び続けるための多様な学びの場・学習コーナー



マット、ローテーブルの増設



子供が必要な支援にたどり着きやすい
思考の流れに沿った導線、場づくり



形成的アセスメントに基づく支援・環境調整のアップデート



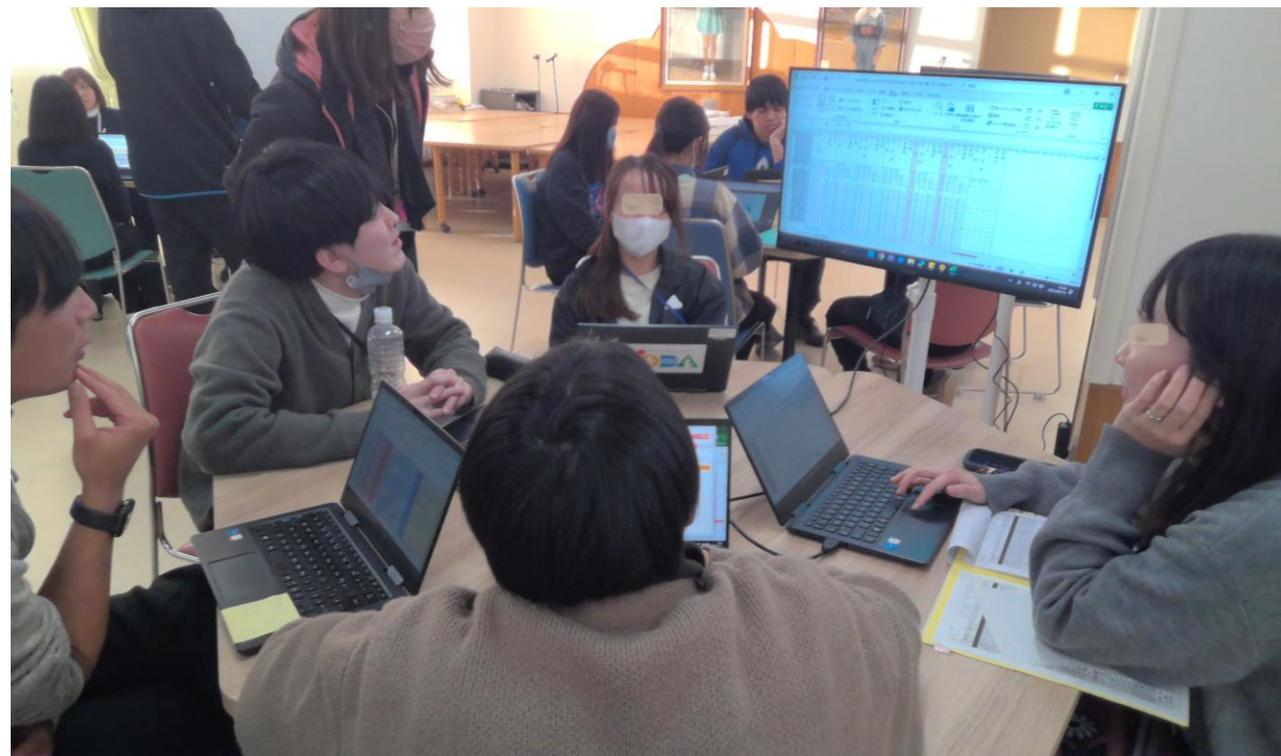
支援教材+教師





効果検証と指導改善

次の単元に向けて、単元指導計画、指導方法、学習形態、教材等の検証と改善のためのミーティング



多層型支援システム

学びの支援

行動の支援

個別の指導計画、個別指導・支援等

第3層支援

個別の支援計画、個別支援等

第2層支援だけでは効果が十分に得られない児童への個別的支援

RTIミーティング・学習評価

サポートミーティング・ケース会議

少人数での指導、環境調整、追加ヒント・教材提供等

第2層支援

戸こっ子支援ファイル、環境調整、意図的・計画的な称賛・承認

第1層支援だけでは効果が十分に得られない児童への配慮や追加の支援

学びの改革P・RTIミーティング・学習評価

支援の改革P・ABC行動分析

各種データの利活用
アンケート・調査データ
授業及び活動の振り返り、
教師の見取り、学習物、
単元テスト等

各種データを利活用
アンケート・調査データ
教職員の観察記録・アセ
スメント、戸こっ子支援
ファイル等

個別最適な学びと協働的な学び
マイペースL、学び方選択、習熟度別、PBL等

第1層支援

スクールワイドPBS、発達支持的生徒指導
3つの大切、行動目標設定表、キャンペーン等

すべての児童が自分に合った学びにつながる個別最適な学びを創造
すべての児童の望ましい行動を学校全体でポジティブな方法で育成

研究成果 R7年度

学力を伸ばした児童の割合の増加
【埼玉県学力・学習状況調査の結果から】

令和6年度5年生

国語 67.3%

算数 47.8%

令和6年度6年生

国語 51.8%

算数 55.3%



令和7年度6年生

69.8% 2.5

75.3% 27.5

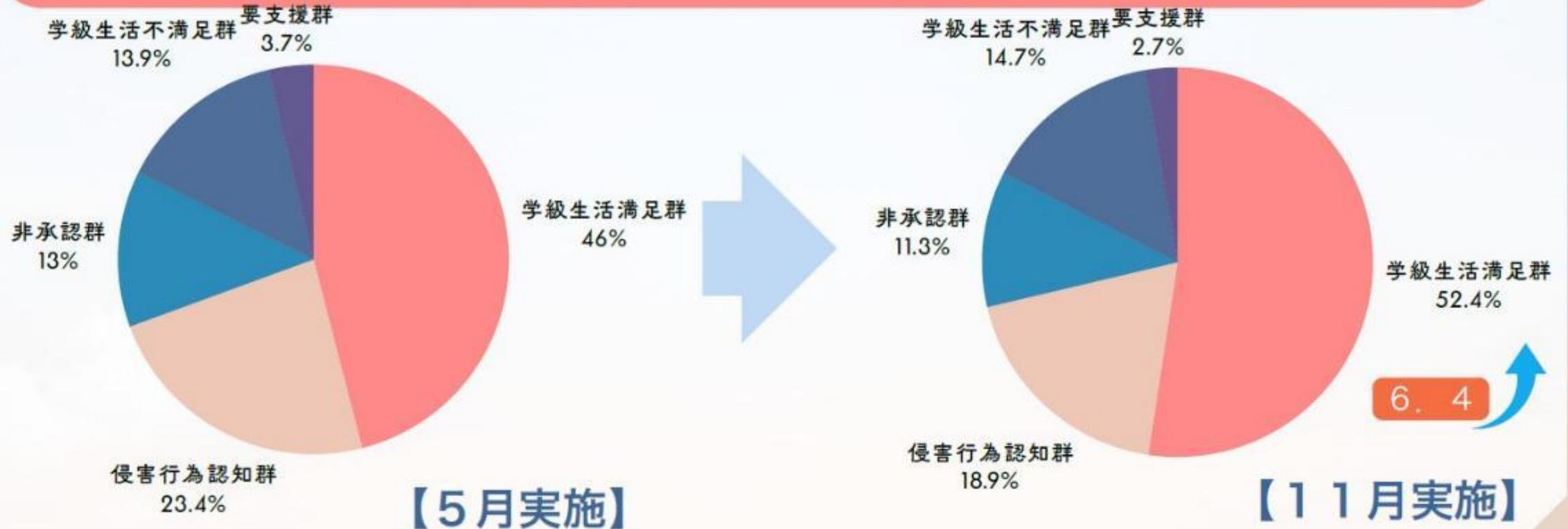
令和7年度中学1年生

90.5% 38.7

67.5% 12.2

研究成果 R7年度

学級生活に満足している児童、友達から認められていると感じている児童の割合の増加 【WEB QU結果から】



【事例】 データ活用がもたらした具体的な変容

データに基づく対話が、教師の「子供の見方」を深め、支え方が変わる。

【 以前の見方（主観的・属人的） 】

- ・「あの子は落ち着きがない」と、課題の所在を個人の性格や特性に求める。
- ・担任が一人で抱え込み、指導が「注意」や「叱責」に終始する。



【 現在の見方（客観的・チーム） 】

- ・「この環境・刺激が原因ではないか？」と要因をデータ（ABC分析）から客観的に探る。
- ・チームで知恵を出し合い、指導から「環境調整」による支援にシフトする。

【具体例：離席が目立つ児童へのアプローチ】

以前：「また立ち歩いて！」「早く座りなさい」と注意を繰り返すのみだった。

現在：サポートミーティングでの分析から、「活動の切り替え時に離席が多い」という事実（きっかけ）を特定。事前に視覚的なスケジュール提示を行うなどの環境調整を実施。

結果：離席が減少し、落ち着いて学習に向かえる場面が増加し、注意や叱責を受けることが大幅に減少した。

最大の成果：

「課題の所在」を、子供自身から「環境や支援とのミスマッチ」へと転換したこと。

取り組みの成果

「システム」と「風土」の両輪が回り始めたことで、子供たちと教師の双方に、確かな変化が生まれています。

【 定量的な成果（客観的指標） 】

学びの伸びと安心感の向上

- ・ RTIサイクルの定着により、「自分の学力を伸ばせている児童」の割合が増加。
- ・ WEB-QU等の指標でも、学校生活に満足を感じる児童が増加。

組織運営のスマート化

- ・ プロアクティブな体制への転換により、大きなトラブルや突発的な対応が減少。
- ・ 事前のデータ分析（予兆の把握）に基づき、問題が大きくなる前に手を打てるようになった。

【 定性的な成果（現場の変容） 】

「思い込み」から「根拠ある見取り」へ
データという共通言語により、誰もが納得感を持って子どもの支援策を話し合えるようになった。

「一人で悩む」から「チームで支える」へ
担任一人が抱え込むのではなく、「学校全体で育てる」という風土が根付き、教職員間の安心感が向上した。

数値の向上（定量）はもちろんですが、客観的な視点で語り合い、一人一人の子供を支える「チーム学校としての協働体制（定性）」が築かれたことが、最大の成果です。

今後の方向性

得られた成果を土台に、取組をさらに「深化・定着」させるための次なるステップ

① 【システム・環境】

自動化による「対話の時間」の最大化

- ・教育データをシームレスに自動連携し、入力・集計の負担を極限まで軽減。
- ・教師の「入力する手間」を限りなく減らし、「データを見て語り合う時間」を更に創出する。
- ・持続可能な体制として、アセスメントやミーティングの時間を時程内に構造化する。

② 【教員のスキル】

データから「支援のヒント」を読み解く力の向上

- ・数値から背景にある要因を見通す「分析力・見立てる力」の強化。
- ・アセスメントスキルと、具体的な支援技術の向上。
- ・全教職員の対話を活性化させる、ファシリテーションスキルの浸透。

③ 【児童】

データ活用を「教師の手」から「児童の手」へ

- ・教師による「支援」のための活用から、児童自身が「学びを調整する」ための活用へ。
- ・児童が自分のデータを知り、自らの学校生活（QOL）を向上させる力の育成。
- ・「自分の成長」をデータで実感し、学ぶ意欲と自己肯定感を高める。

教師の「経験知」に「データ」を掛け合わせ、『令和の日本型学校教育』をアップデートし続けること。それが、誰一人取り残さない学校づくりへの確かな一歩になると信じています。